

清らかな心は清らかな肉体に宿る

阿弥陀寺の起源と奈良の東大寺とは切っても切り離せない関係にあります。8世紀に建立されてから今日に至るまで日本で最も重要な宗教施設という地位を維持し続ける東大寺ですが、1180年、源平の戦いの際に破壊されてしまいました。それでも再建が速やかに進められたため、1185年までには大仏も完成しました。大仏殿の建設には大量の木材が必要になることから、後白河法皇（1127～1192年）は寺の再興事業を任せられた僧の俊乗房重源（1121～1206年）を山口に送り、130本の巨木を切り倒して持ち帰るよう命じました。

重源は1186年に山口に到着し、翌年には東大寺の別所として阿弥陀寺を創建しました。阿弥陀寺の役割は、後白河法皇の安穩を祈ることでした。重源は仏教を学びに中国を訪れたことがあり、阿弥陀寺には重源がそこで目にした宗教的革新性が反映されています。仏国土である「極楽」浄土に住む最も重要な仏であり、この寺の名前の由来でもある阿弥陀如来、そして自己浄化のために湯に入る「浴湯念仏」のどちらも、中国から伝えられたものです。山中腹にある境内は、アジサイで溢れかえる庭園とその中に立つ7つの建造物（2つは入浴用）で成り、国宝や国の文化財に指定された建造物もいくつかあります。